

正義の根本原理にとってもつ「運の平等主義」の位置価

西 口 正 文*

The Positional Meaning and Value of Luck Egalitarianism for Fundamental Principles of Justice

Masafumi NISHIGUCHI

構成

0. 立論のためのいくつかの前提

- (ア) ロールズ流「正義の二原理」が構成される理路
 - (イ) 情況下での最適化としての「統制の規則」
 - (ウ) 「根本原理/統制の規則」と「正義/(正義以外の) 一般的諸価値」という二種の区分枠組
 - (エ) 正義の根本原理たり得るための条件
 - (オ) 「運の平等主義」の本質およびそれに随伴する偏見
1. ロールズの正義感覚と理論構成との整合性の有無
 2. 正義の根本原理はいかにして可能か——G・A・コーエンによる論点
 3. 「人間社会に関する一般的事実」と価値的規範原理との関係
 4. 正義の根本原理を探る理路と「運の平等主義」との関係
 5. 結びに代えて——本探求によって見出された認識と残された課題

0. 立論のためのいくつかの前提

(ア) ロールズ流「正義の二原理」が構成される理路

「正義の原理」と名指されている言明がはたして＜正義＞のための原理たり得ているのか否か？これを尋問するところから、本論文での思考活動は始発する。この尋問に伴う思考を展開するにあたっては、いくつかの前提を明確にしなければならない。

その前提の一番目として、ここでは、ジョン・ロールズ流の「正義の二原理」が構成される理路をあらためて把捉しておこう。こうした脈絡でジョン・ロールズを取り挙げることの所以については、多言を要しないであろう。正義に関する理説を展開しようとしてきた数多の理論家・哲学者達にとって、ロールズ『正義の理論』(A Theory of Justice (1971 年)) はつねに導きの糸であり羅針盤としての位置づけをもってきたこと、そのことを否定することはできないであろうから。明らかにしておくべきなのは、「正義の二原理」という標語に適格する内実を、ロールズがどのように与え定めているのか、である。その与え定め方とは、こうである。すなわち、原初状態 the original position において正義に基礎づけられた社会の基本構造を決定す

*人間関係学科 教授

るために、特殊に選出されてあるひとたちが——ある種の情報群については「無知のヴェール」を被せられてある原初状態の居留民たちが——全員一致の合意に到達することによって、件の原理が与え定められるのだ、ということ。この、ロールズ流の議論の運びは、基本構造とその原理についての決定手続きの持つべき合理性という観点からみると、非の打ち所が無いように思われる。とはいえしかし、そのような手続き合理性を充足することを以って得られた原理が真に＜正義＞の原理としての資格を十全に保証されるのか、と問い直すとき、後続する第1節で論及するように、重大な疑念が生じることになる。

(イ) 情況下での最適化としての「統制の規則」

原初状態の居留民達は、「無知のヴェール」が取り払われた後の社会においてそれぞれ自己が外的・内的資源にどの程度に恵まれているのか／恵まれていないのか、という点をはじめ、さまざまな運にどのように遭遇することになるのか、についてはまったく知る由がなかった。そのことに対して「正義の二原理」はなるほど敏感たり得ていると言えるだろう。「暮らし向きの最も恵まれないひとにとって得ることのできる社会的基本善を最大化する」という分配原則を（第二原理の中の格差原理で）明示しているのであるから。

しかしながら看過されてはならないのは、彼ら居留民達の持つ利己性／利他性の程度は社会世界の現状でのその程度と変わることのないものと見做された上で、論立てされているという点だ。それゆえに、内的資源（主として才能・資質）に恵まれた者にとっての、生産活動への従事に際しての誘因という要素を重視することになる [T.J.: 79,104-105]。こうした論立て上の性格に対応づけるかたちで、この論立ての結果として得られるのは社会の基本構造を統制するための諸規則 rules of regulation なのであって正義の原理たり得ない、とジェラルド・アラン・コーエンは指摘する [Cohen,G.A. 2008 : 274-279]。この指摘に、本論文はおおいに耳を傾けようとする。

(ウ) 〔根本原理／統制の規則〕と〔正義／（正義以外の）一般的諸価値〕という二種の区分枠組

いましがた言及したコーエンは、正義の理説が何よりも重要視するかたちで探り出すべきなのは「正義の根本原理」fundamental principles of justiceなのである、と主張する。彼による主張を生み起こす視座からは、ロールズによる正義の二原理は社会の基本構造を統制するための諸規則 rules of regulation なのであって、正義の根本原理たり得ない、ということになるのであった。つまり、社会の基本構造を決定するための規則・規範を決定するためのロールズ流の手続き合理性に依拠する思考は、正義の根本原理を探り出そうとする思考とは、異質のものだと主張する。本論文はこの指摘にもおおいに耳を傾けようとする。

なお、社会世界を秩序づけるための規則および原理についての普遍的観点からの類別を、コーエンは下記のような分類表に示している [Cohen,G.A. 2008 : 278]。これについても、正義の理説を組み立てるに際してともすると曖昧に混同され錯認されがちな規則および原理への留意を促す類別のあり方として、本論文の第2節で論及する。

【図表◆】

	根本原理	統制の規則
正義	正義の根本原理	特に正義のために役立つ統制の規則
一般的な諸価値	一般的な根本原理	一般的な根本原理のために役立つ統制の規則

(エ) 正義の根本原理たり得るための条件

デイヴィッド・ヒューム以来、正義に関する思考およびそれに基づく立論が依拠すべき事柄として、「正義の状況」circumstances of justiceが挙げられ続けてきた。これは通常、資源の穏やかな稀少性という事柄、利他性の限界という事柄、というふうにとめられてきた。ロールズはこれを踏まえて、さらに彼の言う「人間社会に関する一般的事実」[T,J,137]として「経済理論の原理」・「社会組織の基礎」・「人間心理の法則」などを正義の状況と考えていた[T,J,137;Rawls, John (1980 →) 1999: 351]。正義に関する立論がそれらを踏まえるべきなのは当然だと見做されがちだが、そのように見做し済ます前にひとたび立ち止まって、こう問い直すことがなされてもよいのでは、というよりもむしろ、なされるべきなのでは、ないだろうか。すなわち、いま挙げたような「人間社会に関する一般的事実」とは、正義の根本原理なのではなくて、正義のために役立ったり、正義以外の原理のために役立ったりする、統制の原理だと捉えるべきなのではないか、と。このような問題感覚を深く追求しているコーエンによるならば、正義の根本原理がよって立つ基盤は「人間社会に関する一般的事実」ではなくて、むしろ事実に関する感応性を弱めた原理——規範的な意味志向に支えられた原理——である、と見て取るべきだとされる。この点については、本論文の第2節および第3節で論及されることになるだろう。

(オ) 「運の平等主義」の本質およびそれに随伴する偏見

正義の根本原理を探索しようとする思考にとって辿るべき妥当な筋道（のひとつ）だと思われるのが、「運の平等主義」と名指される¹⁾思想であり理論でもある。行為者各々にとって選択意思を発揮できる事柄——選択行為に向けての制御を行使できるゆえに、その選択行為の結果に対して当の行為者に責任を帰することのできる事柄——と、選択意思を発揮できない事柄と、という認識上の基本的区分を立て、後者を「運」と呼ぶ。行為者各々にとっての善き生へと接近するために都合のよい条件の度合いが、上記の「選択意思を発揮できる事柄」によって左右されることは受容されるべきだが、「運」によって左右されることは分配的正義に悖ることである。きわめておおまかにまとめるとこのようになるであろう運の平等主義の思想を基にすると、分配的正義を実現するための指針は運の作用による有利／不利を無くすこととなる。

いままさに述べたところのその指針に向けて、数多くの批判が提示されてきた。ここでその詳細に言及することは省くが、要するに、善き生への接近条件が運によって左右されることを無くすという方向への取り組みとは途方もなく困難なことであって、むしろ道理に合わないことになる、というのが、批判の概要である[Anderson, Elizabeth (1999); Scheffler, Samuel (2003); 盛山和夫 (2006)]。この批判の立場からすると平等を志向する取り組みとは、各人にとっての社会環境から規定される属性に縛られないというほどの意味合いでの“民主的平等”がめざされるべきことになる。

いま述べた批判の立場が、正義の根本原理を問うという問題構成にあっては決定的難点を持つということ、言い換えると、運の平等主義が正義の根本原理を探索するに当たってはことのほか緊要な意味を持つこと、そのことが本論文の第2節と第3節で論及されることになるだろう。

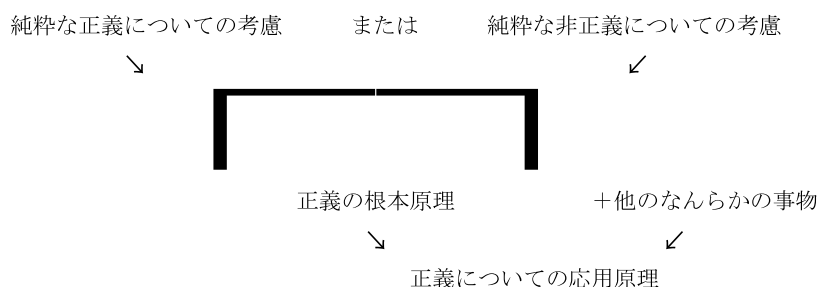
1. ロールズの正義感覚と理論構成との整合性の有無

ロールズによって「正義の原理」が導出される理論装置を、コーエンは「(ロールズ流の)構成主義」と名指して、そこにおける導出論理から帰結することができるのは正義の根本原理

とは異質の規則だ、と主張する。この節では、コーエンによるその主張の持つ重要性度合いについて、検討することにしよう。

ロールズ流の構成主義（……以下では〔C〕と表記する）と自らの提唱する正義の組み立て論理との相違を明らかにするために、コーエンは下記のような図を描いている〔Cohen,G.A. 2008：280〕。

【図表□】



〔C〕では、図の最上段左側に位置する「純粋な正義についての考慮」がまったく消し去られたかたちで、「正義の原理」（と称されるもの）が導き出される。最上段右側に位置する「純粋な非正義についての考慮」は、原初状態における（正義原理の）選定人たちに指し示されている要求——ひとびとの社会的で政治的でもある生活を最適に規制するための基本的な規則とはいかにあるべきか、これを探り出すように、という要求——によって選定人たちが全員一致の合意に到る過程ではたらく考慮のことが示されている。当の考慮の中では、なるほど、個々の人間存在のあり方についてまずは自由かつ平等の尊厳を認められるべき存在という規範的意味づけが——個々の事実的人間存在のありように依拠するというのではなくて——与えられ（それが正義の第一原理に結実することになり）、「無知のヴェール」下で善き生への接近条件における有利さ（不利さ）度合いについては、その各人ごとの相違に関する事実情報が隠されてあるのだから、その種の事実にもとづいた選定のための意識活動がなされないようになってはいる。だが他方で、「人間社会に関する一般的事実」に基づく意識活動が（も）なされることになっている。ここに謂う所の「事実」とは、経験科学において通用的に用いられている語の含意としての事実、すなわち、社会世界の現状において通用する意味づけが受容されてある事実である。厳密な手続き合理性を経るとはいえ、上記のようにして、部分的には事実に基づく意識活動に依拠するかたちで組み立てられた〔C〕とは、コーエンの視座からは、その中に正義の根本原理を見出しえない性質のものであって、せいぜい正義のために役立つ統制の規則を立ち現わせることのできる性質のものに留まる。

コーエンの強調するのは、いま述べたような〔C〕への批判を通していっそう明確に意識されてくる、正義の根本原理を見出すための理路の中身である。すなわち、【図表□】の最上段左の「純粋な正義についての考慮」を取り消さずに、事実に関する感応性を弱めた原理——規範的な意味志向に支えられた原理——としてむしろ端的に正義の根本原理を探る、という理路の大切さを、コーエンは強調する。

正義の根本原理を探るための理路に関するここでの言及は、以上に留める。この点についてのより立ち入った考察を、第2節で行なうことにして、むしろここではロールズの表出する正義感覚と〔C〕との整合性の有無に関して、問うておくことにしよう。『正義論』第二章「正

義の諸原理」においてロールズは、道徳上の観点から見て取られる自然的恣意性および社会的恣意性によって、ひとびとの社会的で政治的でもある生活に資する基本善（財）の分配上の有利さ度合いが影響されることを排すべきだとする論脈を、確かに提示していた。この論脈は、ロールズの思想の中では根底に位置づいているといっても過言ではないであろう正義感覚のあり方の現われであって、正義の根本原理へと結びつく性質を帯びている。ところが第三章「原初状態」の叙述は、既にこれまで述べてきたように、『図表◆』に記されたところの「統制の規則」を——主として「一般的な根本原理のために役立つ統制の規則」を、そして一部分だけは「正義のために役立つ統制の規則」を——定めることへと（二章での論脈に拠って立てば）向きを変えてしまっているのだ。そのことを正当化するかのように、次の言説が現われている。

倫理の第一原理群は、あらゆる偶発的な諸想定から独立しているべきであり、論理的な真理や概念分析によって概念から得られる真理以外のどのような真理も、第一原理群は当然のこととみなしてはならない、と考える哲学者もいた。道徳的な構想はすべての可能世界で妥当すべきだとされる。さてこうした見解は、道徳哲学を世界創造の倫理の研究へと変えてしまう。つまり、すべての可能世界の中で最善の世界はどれであるのかを決定する際に、全知全能の神が心に抱くかもしれない反省についての考察に帰してしまう。……………だがこの倫理は、人間の理解力の範囲を超えているように思われてしまう。[T.J.159]

ロールズによるこの言明を支えにして、正義の根本原理をいかにして探り当てるかということに心を砕くには及ばず、[C]が行なっていること、すなわち、ひとびとの社会的で政治的でもある生活を最適に統制するための基本的な規則とはいかにあるべきか、これを探り出すことで——「正義の二原理」という成果を得られたことをもって——充分だ、と考えようとする見解が勢いを増すことになるかもしれない。

2. 正義の根本原理はいかにして可能か— G・A・コーエンによる論点

前節での考察を踏まえるならば、＜正義の根本原理はいかにして可能か＞という中心問題に向けてかなり明瞭に答えることができる。この中心問題を解く上で鍵となるのは、いわば「事実拘束された原理、もしくは、事実に感応する原理」fact-bound principlesと「事実にかかわる拘束から解かれた原理、もしくは、事実に不感応な原理」fact-free principlesとの関係を露開しようとする探求上の構えなのである。この構えを採用することによって、[C]の持つ難点が把握されるわけだ。[C]は、基本的には「人間社会に関する一般的事実」に依拠することを通じて社会的政治的生活を統制することのできる「統制の規則」に辿り着こうとする性質の思考脈絡を保持していた。それは、社会や政治への経験科学的なアプローチにおいて典型的に表われる思考脈絡と共通性を有するものである。とはいえ、前節で既に言及したように、部分的には事実性を超越した規範的契機が——自由かつ平等な尊重を以て遇されるべき諸個人という想定や「無知のヴェール」という装置を必要視する想定に見出される規範的契機が——[C]には見出されもした。見出されるその契機はしかし、断片的であり、一貫した論理を以て展開されてはいないこと、そのことが洞察されなければならない。

[C]のもつ限界について、ここで再びコーエンによる批判的論及を援用しつつ、さらに立ち入って展開しよう。ロールズにあっては、「何が正義なのか」という尋問が「我々の営む日々

の事柄を統制するという目的のために、我々はどんな諸原理を採用すべきか」という尋問と同一化される、という誤認が見て取られる [Cohen,G.A. 2003 : 244]。後者においては、「日々の事柄」に纏わり付く事実、より正確には、事実としての認識に帯びる意味もしくは価値に、依拠するかたちをとって、統制のための諸原理が採用される。ということは、既に安定態において存続している秩序体系を組み立てている要素としての意味もしくは価値を前提にして、当の秩序体系を正当化する方向において、統制のための諸原理が採用される、ということだ。つまり、所与の秩序体系を前提として統制するための諸原理が選び取られることになる。そしてその選び取り方は、「何が正義なのか」という尋問にまともに答えようとする姿勢（構え方）ではない。

この点をもう少し掘り下げるために、事実性と価値的規範的原理性との関係をいかに捉えるべきなのかについての、コーエンによる考察に視軸を向けてみよう。

すべての原理は事実に感応しているという見解は、*表面的には*（——筆者による補足）道理に適っているように聞こえるのだが、しかしその見解が論証できるかたちで誤っている、と私は強く思う。その見解がすべての原理について当てはまるはずはないし、事実に感応しない原理——これが、所与の事実が事実に感応する原理を根拠づけるのは何故かを、説明するのであるが——については、はじめに言った当の見解が虚偽であるという理由を以ってするだけで、諸原理の中の一部分にのみ当てはまるのだ、と私は強く思う。私の見解では——それは私による命題でもあるのだが——、ある事実とはいかなる事実への反応でもないところのある原理への反応でもある、というただその理由のゆえに、原理なるものは事実を反映したり事実に応じたりすることができる。その同じことの要点を別様に表現するならば、事実を反映する原理とは、事実を反映するためには、事実を反映していないところの原理を反映していなければならない、ということになる。[Cohen,G.A. 2003 : 214]

上記引用箇所が明確に説いているように、価値的規範的原理（性）とは事実性自体に依拠すると見做す見解は、端的に誤っている²⁾。この点については、それ以上の説明を要しないだろう。ここに論じられている、事実ではなくて価値的規範的原理の始原性という点を、思考実験として例示するかたちでコーエンが説明している件を、続いて引用することにしよう。その件とは、“事実”という基礎(?)に拠って立って規範的原理を提起しようとする場合と、“事実”に拠るのではなく反事実的に規範的原理を提起しようとする場合とを、対照させるかたちで、規範的原理の本質を照らし出そうとする性質を帯びたそれである。

たとえば、通常の寿命がわずかに24時間であるのだが、その他の点では成人の状態である私たちと変わらない、そのようなひとに向けて私たちはどんな原理を支持することになるのか、それを述べようと試みることは私たちを当惑させる事柄だ。その種のひとの存在については、それがただ哲学者たちの頭の中にだけ存することに向けてしばしばけなされてきたのだけれども、2001年から3000年までというこの1000年間が終わる頃までには生物学者の実験室で、作り出されることになるのかもしれない。このような、きょうは現存して明日には死去してしまうひとの自由とは——福祉との比較において想定されるような自由とは——、私たちが私たち自身の自由が重要であると考えてのと同じ程度に重要で

ある、と私たちは考えるであろうか？あるいはまた、このようなひとの自由とは、彼らにとっての福祉との比較において考えるとすると、その重要度合いが小さくなる、と私たちは考えるであろうか？これは難しい問いかけであるが、再び述べておくと、その難しさというのは、議論のもつある特定の性質を帯びた力を減少させはしないのだ。すなわち、ある諸事実の観点から原理Pが支持される場合には、それら諸事実の観点から原理Pが支持されることになるのは何故であるのか、これを説明するところの、事実から自由なある原理に、私たちは参加を要請することができるのだ。私たちの得る説明とはしかしながら、次のように予想される場合においては、不完全な性質のものである。すなわち、わずかに一日だけ生きるひとたちのためにどんな原理を私たちは支持しようとするのか、そのことが私たちにはよくわからないのならば、数十年間持続する生存に向けて私たちが支持するところの諸原理を、私たちはなぜ信じるのか、その理由を私たちは十全に理解することはできない。なぜならば、数十年間という寿命のひとについて、その生存の規範的意義を、寿命が24時間であるひとについての生存の規範的意義とは異なるものとせしめるのは、何なのか。そのことを私たちは知ることができないのであるのだから。[Cohen,G.A. 2003: 226-227]

ひとにとっての善き生のあり方や社会正義のあり方についての根本原理とはいかにして可能か、これに照準しようとするとき、上記引用に表われているコーエンの思考は示唆に富む。寿命わずかに24時間のひとという設定の下にも、その自由や福祉に向けての価値的規範を意味づけようとする構え方において、寿命数十年間という通常のいわば“事実性”を帯びたひとの場合とは異質な、“事実性”の相違に依拠した構え方を持ち込むことの困難さを、感得させてくれる、と言えるのではないだろうか。まさにこの思考実験に深く関連づけてコーエンの語っているところを、さらに示しておこう。「事実に関する感応性を弱めた原理ということ肯定して捉える命題は、事実に関する情報が適切にあたいするかのようにもたらされる場合に派生的に(——斜字体箇所は筆者による補足)形成されるところの原理ということ肯定して捉える命題に対して、論理的には先行する。事実に関する感応性を弱めた原理によって享有されるその先行性とは純粋に論理的なる事である。————事実に関する感応性を弱めた原理の論理的先行性とは、原理についてのどんな発話がひとに向けて誓約を行なうのか、という問題である。」「あれやこれやの事実に関する状況を前提にして、私たちは何をなすべしと考えるかを尋問するのが、私たちの原理が何であるのかを決定するための実りある方法であるということ、そしてときにはさらに、事実への応答が私たちの原理を明るみに出すということ、そうしたことを私が否定しないのはなぜかについての理由が、事実に関する感応性を弱めた原理の論理的先行性なのだ。」[op.cit.227]ここに示されたコーエンによる言説は、逆説的な言い回しを含みながらも、軽視できない内容を備えている。事実性と価値的規範性との関係を掘り下げて問うならば、必然的に到達する、当の関係把握の在り方が、ここには指し示されていると見て取れるからだ。つまり、事実性に触発されるということが契機となって価値的規範性が意識化され明識されるに及ぶことがあったとしても、その場合の意味秩序の生成脈絡を問い直してみるならば、事実性が始原に位置するわけではなくて、価値的規範性の方が始原に位置することが見出されるのだ。

それゆえに、正義という価値的規範性と事実性との間で意味秩序の生成脈絡を問い直すとすると、前者の論理的先行性という認識に到達する。すなわち、「人間社会に関する一般的事実」との比較においては正義の根本原理が始原に位置するのだ。

3. 「人間社会に関する一般的事実」と価値的規範原理との関係

前節で展開した論脈を踏まえるならば、自らの原初状態に関する叙述が基本的にその性格を帯びているのを認めている契約理論について、ある点では功利主義と見解を合致させる、とロールズ自身が明言していることを看過できない。すなわち、契約理論によって構成された“正義の根本原理”（——ロールズがそう見做すところのもの）は、それが人間と社会についての自然的事実に適切に依拠していると考えている点では、契約理論と功利主義は見解を合致させるのだ、とロールズは述べている。その際にロールズは自らが見做すところの“根本原理”を擁護するために、人間と社会に関する自然的事実を——奴隷制や農奴制は人間にとって幸福を最大化する制度装置ではない、というような自然的事実を——援用する手続きを、支持している [T.J.158-159]。その箇所でのロールズによる所説を対象にして、コーエンが組み立てようとしている議論 [Cohen, G.A. 2003:239-240] に、この節ではまず、視軸を向けておこう。

ここでのコーエンによる議論は、「人間社会に関する一般的事実」と価値的規範原理との関係をめぐるロールズの所説の誤りを指摘すべく、試みられた興味深い内容のものである。コーエンはまず、奴隷制を容認する要素を含み持っている功利主義との関係において、ロールズの見解がどのようになっているか、その本質を照らし出すことができるように、ロールズによる奴隷制への反対説の中に蔵されていながら、しかしロールズ自身は捉え損なっているところの曖昧さを、剔抉しようとしている。その曖昧さとは、奴隷制に向ける二様の反対説をロールズが一様な内容だと見做し済ませている点である。

二様の反対説を明示化するかたちで、コーエンは次の A と B とに識別される反対説提唱者を描き出している。「A: 私は功利主義に対して、以下の理由で反対する。もし我々が功利主義を採用することになるならば、我々は奴隷制を制定しなければならない状況に（というのも功利主義は幸福の量を最大化しようとするものなのだから）直面する可能性がある。私は奴隷制にはすぐく反対だ。このような理由である。」「B: 私は功利主義に対して、以下の理由で反対する。もし状況が、奴隷制を制定することによってのみ我々にとっての効用を最大化することができる、というようなものであるならば、我々は奴隷制を制定すべきである、とそのように功利主義は論立てする。そのような論立てをもって立ち現われる功利主義に対して反対なのだ。このような理由である。」これら双方の反対説に向けて、次のような応答言明がなされた場合のことに、この議論は展開する。「奴隷制は事実上、幸福量を最大化するような様態にけっしてならない。」この応答言明を得た後に、A と B それぞれが功利主義に向ける構え方は、はっきりと異なる向きを採ることになるだろう。A は功利主義を受容することになり、B は反対の立場を変えることなく、むしろ次のような意思表示をいっそう鋭敏に打ち出すに到るだろう。すなわち、奴隷制が正当化されるか否かは“保険統計の計算”に依存させられるべきではない、という意思表示を。

「人間社会に関する一般的事実」と価値的規範原理との関係に引き付けるかたちで、コーエンによるこのような筋立ての議論から汲み取るべき解釈とは、次のようになるであろう。ひとびとの（社会構成員達の）幸福量の最大化ということに依拠して、正義の原理と「人間社会に関する一般的事実」とを接合しようとする思考に——むしろ「人間社会に関する一般的事実」に依拠して正義の原理を導出しようとする思考に——、我々は陥りがちである。繰り返して言及してきたように、原初状態での正義の原理導出の際のロールズの理路にも（[C] にも）思考のその向きが存することを窺い知ることができた。そのような思考の向きに対抗させるかた

ちでコーエンが提唱するのは、論理的先行性を帯びて端的に正義の根本原理を見定めることの必要性なのだ。

ロールズとコーエンとの対照を軸にして、本節での論題および前節での論題に迫ろうとする先行研究として、井上彰による論及〔井上 2014:161-168, 2017:151-152,179-183〕がある。本論文での考察と噛み合う部分を探し出すこともできるとはいえ、井上による論及においては、むしろロールズによる正義原理の導出理路を支持している。事実性と価値的規範性との間での論理的先行関係をめぐる捉え方に関しても、その視座は、〔C〕と正義の根本原理への探索との比較においてコーエンによる主張の方を支持しようとする本論文の視座と比べると、かなり大きな相違がある。相違の生じる要因のひとつは——主要な要因は——、事実性と価値的規範性との関係をめぐるメタ倫理的認識に対する構え方だ、と言えるかもしれない³⁾。

4. 正義の根本原理を探る理路と「運の平等主義」との関係

4-(1). 「運の平等主義」の基盤をなす思想

正義の根本原理を探ろうとする企図のもとで直観的に見出されるのが、「運の平等主義」である。それは、第0節で提示した『図表◆』に即して位置づけるならば、四つに区分された領域のうちで左上に位置する「正義の根本原理」にまさに位置づく思考の性格を有している。思考の理路として述べるとすれば、分配的正義へと漸近するためにはひとにとって制御不可能な要素＝運によってそのひとの善き生のための条件が——生にとっての都合よさへの接近条件が——影響されない様態へと向きをとるべきだとする直観、それを正義の根本原理と考える、というものである。

本論文が他に代えがたく注目するに値する論者として参照しているジェラルド・コーエンはこの運の平等主義にくみすることになる。そのコーエンによれば、運の平等主義という思想的立脚点に基づいて考え進めようとする者は、社会生活のための諸原理を設計することに従事するわけではない。その理由はというと、第一に、運の平等主義が焦点を合わせようとする分配的正義についての直観にとっては、社会を組織するに際して考慮に入れられるべき唯一の規範が存在することは、正気とは思えないことであろうから。第二に、たとえ運の平等主義が充足されるべき唯一の規範であると仮定するとしても、その充足というのは、認識上の、そして諸多の制約のゆえに、どんな事柄においても粗雑だが目的に適うという大雑把なやり方以外には、充足され得ないのであるから。要するに、運の平等主義に立脚しようとする者は、分配的正義のまさに本質に関心を持つのであって、一つの社会の基本的要素としてどんな原理をその社会が採用すべきなのか、というまた別の種類の問いには、関心を持たないのである〔Cohen,G.A. 2008:300-301〕。

運の平等主義という思想のもつこうした問題構制への無理解から生じるのが、エリザベス・アンダーソンに典型的にみられる議論の組み立て方である。現にある社会世界の意味秩序を問い直すことを欠いたままに、この思想を実施しようとする場合に出来るであろう、平等処遇のための補償措置のもつ意味の過酷さを、非難の意を込めて挙げ示すこと、そのことに集中する議論のことだ。実施する上での困難はむしろ織り込み済みなのであって、しかもその困難の度合いは社会世界の意味秩序の変動に応じて可変的だという点への洞察をも踏まえて、運の平等主義という思想は——そしてその問題構制は——存立する。この点への認識が必要となるわけである。

4-(2). 分配的正義への照準

コーエンによるこうした議論が示している、運の平等主義という思想の中心にある論点については、コク・コール・タン Kok-Chor Tan がさらに掘り下げて展開している。以下では、この思想をタンが独自の視点から掘り下げて解明しようとして得た成果を、本論文の主題に深くかかわる内容に限定して、取り挙げることにしよう。タンがまず何よりも強調するのは、分配的正義に焦点を合わせるというこの思想の性質は、次のところにその根拠を見て取れることである。すなわち、分配的正義を考えるに際しての基盤をなすべきなのは、ひとにとって選択／運というかたちを採った厳密な区別である。出発点には平等分配が据えられ、そのうえで、この区別に基づいて、ひとの制御可能な条件下での選択に対してはそれに応じた責任が伴い、分配上の差異が持ち込まれるべきことになり、ひとにとってその作用を制御できない運の作用による結果事態に対してはその作用を消去する補償措置が取られるべきことになる。そのような規範論理に基づいてこそはじめて、分配的正義が達成される向きを採ることができる [Tan, Kok-Chor 2008:669-671]。このかぎりでは、コーエンによって開示された見解をタンが再確認しているにすぎないのだが、この再確認を踏まえてあらためてロールズ流の正義の二原理、特に第二原理を対象化するならば、次のような難点を孕んでいることに気付くことができる。格差原理をその重要な部分として含む正義の第二原理が、正義の根本原理にあたっているのか？端的にはこの問いについて熟考する必要がある、これに肯定的に応答しようとする、困難を来すことになるだろう。それは、そもそもこの原理が民主的互惠 democratic reciprocity という思想に依拠しつつ、“暮らし向きの最も恵まれない者にとってその利益が最大化するように”という分配上の原則を表現しているからである。つまり、謂う所の“暮らし向き”の恵まれる者／恵まれない者という区分が（差異が）何故に生じることになるのか、その生じる理由を正当化し得るのか否か、という基盤をなすはずの尋問が、なされずに済まされているからである。

4-(3). 主題としての制度

民主的互惠という思想に依拠して正義原理を考え進めようとする論者たちは、諸個人にとっての社会的環境——身分や家柄や階級や性別など——によって各人にとっての善き生を築くに際しての条件という観点からみたときの恵まれ度合い（有利さ度合い）が影響されることを、不正義だとする。すなわち、各人の視点からすれば社会的運もしくは社会的偶有性によって有利さ度合いが左右されることを不当とする。ところが、当の論者たちは、生得的資質・才能の恵まれ度合いといういわば自然的運もしくは自然的偶有性によって各人にとっての善き生を築くに際しての条件という観点からみたときの恵まれ度合いが左右されることを、正義にとっての第一義的に問題化すべき論題とはしない。それに対して運の平等主義という思想に立脚する論者たちは、社会的運による有利さ度合いの影響を消去しようと試みるにとどまらず、自然的運の作用を、正義にとっての第一義的な論題として、問題化する。この思想の目標とするのは、自然的偶有性から発する事柄をひとびとにとっての現実の社会的有利さや不利さへと転換することのないように、諸々の制度が配備されるのを確保することなのである⁴⁾。

4-(4). 分配的正義はなぜ重大な事柄なのか——正義の根本原理へと通じる脈絡

タンによれば、民主的互惠という思想に即しても運の平等主義による分配的平等という思想に即しても、いずれも基礎原理 a grounding principle と実質原理 a substantive principle という二種の原理を有していることになる。民主的互惠における実質原理とは、ロールズに即して

言えば、格差原理によって何をどのように分配するかを特定する。それに対して基礎原理とは、格差原理がそれに適合するように立案されているところの、平等への関与的責務を動機づける原理である。その原理の中では、富める者と貧しき者との間の較差が、互恵の関係の中にある道理になかったひとの受け容れられる較差を超える大きさになることはできない、という理由のゆえに、平等が重要性を持つと考えることになる。

これらと比較するかたちで、運の平等主義による分配的平等における実質原理および基礎原理が、それぞれ次のように説明されている。まず実質原理とは、分配的正義についての必要諸事物を明確に述べて、そのための手段を提供し得るかたちで何をどのように分配するかを定める原理のことである。ここでの基礎原理とは、分配的平等を目的として運の平等主義に基づいて——その中心をなす選択／運という区分に基づいて——提供される原理のことである。つまり、運の平等主義という思想のもとでの選択／運という区分原則が、分配的平等への関与的責務に向けての動機づけとなる理由を、提供する。そこでの基本的思考は、ひとの生活上の機会への運による影響力を諸制度の介在によって統制するために、分配的平等主義に立脚する者の負うべきなんらかの関与的責務が重要なことになる、というものだ〔Tan, Kok-Chor 2008:674〕⁵⁾。

民主的互恵における基礎原理への格差原理の持ち込まれ方、および、運の平等主義における選択／運という区分原理の説明力、これらに注目して上記のタンによる説明を受けとめ直してみよう。そうすることによって、次のことを捉えることができるだろう。その思考の基盤に正義原理がいかに位置づくか、という観点からみると、民主的互恵には曖昧さが再確認され、運の平等主義による分配的平等が目的とされる思考において、特にその基礎原理を打ち出す脈絡での思考を以ってこそ、正義の根本原理へと向きを採り得るということに、気づくことができる。

4-(5). メリトクラシーの正当性問題への「運の平等主義」による解

コーエンとタンに依拠しつつここまで考察してきたことを踏まえると、社会世界でいままなおその“基本的構成原理”として機能しているところのメリトクラシーについて、その正当性問題を解くことができるようになる。メリトクラシーのありうる形態として想定され得るものの中でそれを超える程度につつましく控えめなかたちを、ほとんど考えることができないほどに抑制が効いていて、とはいえメリトクラシーとしての性質を確かに保持している、そのような分配原理を、ロールズによる「格差原理」は体現している。その「格差原理」が正義の根本原理たり得るか否か、こう問い直すならば、いまや我々は明確にその解を、否として示すことができる。それが、“暮らし向きの最も恵まれぬ者にとって得られる利益という観点から最も有利”という、分配にあたって功利主義の要素を色濃くもつかざりでの統制のための規則だと、同定されるからである。

この基礎的洞察をもとにすれば、格差原理に比して分配上の不平等度合いがさらに大きくなるのを許容するメリトクラシーは、正義の根本原理に値しないことが明白となる。つまり、ロールズのかける抑制をはずしていっそう個人の利己的心性を認めるとともに、自己所有権を無批判に受容した様態を、ロールズ流に表現するならば「人間社会に関する一般的事実」として導入したうえで、社会統制の規則として立ち現われるのが、メリトクラシーであるのだから、それは正義の根本原理とは相容れない性質のものとなる。本来、規範的価値としての社会正義を志向する立場に立とうとする者が、メリトクラシーの取り扱いに困難さを感じる必要はなかったわけである。メリトクラシーを克服の対象ではなく「飼い慣らし」の対象とするという思

考は、社会正義を志向するのではなく、さまざまに凝固し惰性化してある「人間社会に関する一般的事実」にこそ基づいて社会統制の規則の現実的合理的形態を追い求めるという立場において、成り立つものなのだ。

5. 結びに代えて——本探求によって見出された認識と残された課題

主にジェラルド・コーエンおよびコク-コール・タンによる示唆深い探求成果に導かれつつ、本論文において見出すことのできた認識を、ここであらためて整理しておこう。

ロールズ流構成主義を通じてもたらされた「正義の二原理」とは、正義の根本原理を探るための理路たりえず、せいぜいのところ、正義のために役立つ統制の規則を立ち現わせる性質のものであった。G・A・コーエンから学ぶことによって洞察を得られることとして、正義の根本原理は、事実感応的ではなくて事実不感応的に（反事実的に）照射される価値的規範的原理の始原性への覚識を通してこそ、探り出されるのであった。この点をもとにしてさらに解釈を展開すると、次のように言明できるであろう。事実性に触発されるということが契機となって価値的規範性が意識化され明識されるに及ぶことがあったとしても、その場合の意味秩序の生成脈絡を問い直してみるならば、事実性が始原に位置するわけではなくて、価値的規範性の方が始原に位置することが見出される。それゆえに、正義という価値的規範性と事実性との間で意味秩序の生成脈絡を問い直すとする、前者の論理的先行性という認識に到達する。

正義の根本原理に位置づく思想としては、運の平等主義がある。運の平等主義という思想のもとでの選択／運という区分原理が、分配的平等への関与的責務に向けての動機づけとなる理由を、提供するわけであるが、そこでの基本的思考は、ひとの生活上の機会への運による——社会的運および自然的運という双方による——影響力を諸制度の介在によって統制するために、分配的平等主義に立脚する者の負うべきなんらかの関与的責務が重要なことになるというものだ。

本論文が探求してきたことを、翻ってメリトクラシーを対象として整理し直すならば、格差原理に比して分配上の不平等度合いがさらに大きくなるのを許容するメリトクラシーは、正義の根本原理に値しない、という結論を（この上なく明白に）得るに到る。つまり、ロールズのかける抑制をはずしていっそう個人の利己的心性を認めるとともに、自己所有権を無批判に受容した様態を、ロールズ流に表現するならば「人間社会に関する一般的事実」として導入したうえで、社会統制の規則として立ち現われるのが、メリトクラシーであるのだから、それは正義の根本原理とは相容れない性質のものだ、と判明する。

以上の認識を得ることができたが、残された課題として、運／選択という区分に深く関与することになる、行為への制御の可能度合いをいかにして捉えるか、という課題、さらに、メリトクラシーと功績——相応の報い——との関連と識別をいかにして明確化するか、という課題、これらが差し迫って取り組まれるべき課題として挙げられる。これらに向けての探求は他日を期したい。

【註】

- 1) この名指しは、ロナルド・ドゥオーキンやリチャード・アーヌソンやジェラルド・コーエンらの平等主義的
正義を志向する立論の全体像を対象として、それを特徴づけようとする意図から、エリザベス・アンダー
ソンが始めたものである [Anderson, Elizabeth (1999)]。この名指しに向けて、ドゥオーキンは受容しな

- い [Dworkin, R. (2003) :190-194] が、コーエンは（名指しに限っては）受容している [Cohen, G.A. (2008) :8], というように対応は分かれる。本論文では主としてコーエンによる理説に照準するところから、（問題含みの名指しではあれ）コーエンが整理し直した上で受容しているこの語を用いることにする。
- 2) こうした論脈にかかわって、〔原理（価値的意味を帯びたそれ）／事実〕についての関係認識と〔当為／存在〕についての関係認識とを混乱させず識別すべきことが、コーエンによって論及されている [Cohen, G. A. (2003) :230-231]。この論題に関してのいっそう立ち入った議論としては、[北田暁大 (2003) : 86-105] が挙げられる。一般に存在 Sein (be) についての認識から規範 Sollen (ought) についての認識への移行は禁じられるべし、とするデイヴィッド・ヒューム流の格言を意識しつつ、＜「関係性＝制度の学」である社会科学と人・間という関係性をめぐる倫理（もしくは正義や善）の学とを架橋することは、いかにして可能か？＞と記すことも許されるであろう問題に向き合おうとする北田による理論的企ての全体は、根底的でありかつ創発的でもある着想に満ちていて、本稿の問題意識にとって看過できない重要な研究成果である。北田の示唆する内容は深く、その検討を主題化する仕事には、別の機会に取り組みたい。
 - 3) この点について、筆者の視座から論及しておこう。事実と（価値的）原理との関係認識の基本は、なによりも事実の帯びる価値（による被）拘束性に敏感となることである。その点にかかわって言えば、「人間社会に関する一般的事実」をいかなる価値的意味づけからも客観性を帯びて独立した内実において捉えようとするのは、誤りである。そうした誤りから、井上による議論が逃れえているかどうかというところで、疑念が残るように筆者には思われる。
 - 4) こうして、自然的な運の作用を制度の配備を媒介として制御することにより、社会的正義の基盤たりうる運の平等主義が実質化することになる。このとき留意されてもよいこととして、自然的運の中でそれを制度上の制御の対象となし得ない——制度上の配備によってでは取り扱えない——事柄については、運の平等主義にとっては埒外の論題となる [Tan, Kok-Chor (2008) : 671-672], ということがある。もちろん、そのような論題が正義にとってもつ重要度合いが低下するというわけではないであろう。
 - 5) タンによるこうした識別の仕方を、第0節で『図表◆』として示した識別のしかたと、次のように結びつけることができる。運の平等主義による分配的平等における「基礎原理」そして「実質原理」がそれぞれ『図表◆』における「正義の根本原理」そして「一般的な根本原理」に、結びつけられる。民主的互惠における「基礎原理」そして「実質原理」がそれぞれ『図表◆』における「特に正義のために役立つ統制の規則」そして「一般的な根本原理のために役立つ統制の規則」に、結びつけられる。

【文献】

- Anderson, Elizabeth S. (1999) What Is the Point of Equality?, *Ethics*, 109, no.2
- Cohen, G.A. (2003) "Facts and Principles" in *Philosophy and Public Affairs*, 31, no.3
- Cohen, G.A. (2008) *Rescuing Justice and Equality*, Harvard University Press
- Dworkin, R. (2003) "Equality, Luck and Hierarchy" in *Philosophy and Public Affairs*, 31, no.2
- 井上彰 (2014) 「ロールズ—「正義とはいかなるものか」をめぐって」(齋藤純一編『岩波講座 政治哲学 5—理性の両義性』所収) 岩波書店
- 井上彰 (2017) 『正義・平等・責任—平等主義的正義論の新たな展開』岩波書店
- 北田暁大 (2003) 『責任と正義—リベラリズムの居場所』勁草書房
- Rawls, John (1971) *A Theory of Justice*, Harvard University Press
- (これを本文中では T.J. と略記している。)
- Rawls, John (1980 → 1999) "Kantian Constructivism in Moral Theory" in S. Freeman (ed.) *Collected Papers*, Harvard University Press

Scheffler, Samuel (2003) “What is Egalitarianism?” in *Philosophy and Public Affairs*, 31,no.1

盛山和夫 (2006) 「責任 - 平等主義とリベラリズムの深化」(盛山『リベラリズムとは何か』勁草書房 所収)

Tan,Kok-Chor (2008) “A Defense of Luck Egalitarianism” in *The Journal of Philosophy*, vol.cv,no.11